

本当のオットン

奄美市立小湊小学校 五年 杉本 寛喜

「オギヤー、オギヤー。」

太陽の光をサンサンにあび、クロウサギの赤ちゃんが、小湊の森にたん生しました。セミたちも、喜びの歌をミーン、ミーンと大合唱しています。お母さんになったクロも、みんなにしく福され、うれしそうです。

でも、一人だけちがう者がいました。赤い目でこちらをにらみつけるようにみている者。オットンガエルのオットンです。オットンは、ひとりぼっちでした。家族もいません。背中には、ごつごつとしたいぼがならび、どす黒い顔で、いつもむすつとしていました。話もほとんどしないため、みんなにこわがられていました。

オットンが遠くから、そのような様子で見ているなんて気付きもしないクロは、みんなの笑顔に囲まれ、幸せそうです。オットンは、その光景を一時見ていましたが、いつの間にか森のおくに消えていきました。

赤ちゃんが生まれてクロは大いそがし。おっぱいをあげたり、おむつをかえたり、休むひまがありません。でも、赤ちゃんがかわいくてたまらないクロ。いそがしくても、毎日たくさんの愛情をかけ育てました。お母さん

の大きな愛を受け、赤ちゃんは、すくすく育ちました。季節は秋になりました。クロはいつものように、赤ちゃんのえさを取りに、森のおくのしいの木に出かけました。紅葉した木々が、今日もクロをむかえます。地面には、自然の恵みがたくさん落ちています。

「赤ちゃんの好きなしいの実もいっぱい落ちているわ。きつと喜ぶでしょうね。」

クロは、赤ちゃんの喜ぶ顔を思いうかべて、ふふふと笑いました。

かごいっぱいになった木の実をかかえ、クロは、家路を急ぎます。

「赤ちゃん、お待たせ。おいしいしいの実がたくさんとれたわよ。」

でも、返事がありません。クロは、いやな予感がしました。寝室やトイレ、台所、いたるところを探しましたが、赤ちゃんはいません。もう一度家の中を探します。そのとき、何かの段差につまずき、クロは転んでしまいました。それは、オットンガエルの足跡でした。

「まさか、オットンが……。」

クロは、あわててオットンのところへ向かおうとしました。そのとき、ルリカケスのルリにぶつかりました。

「おい、どうしたんだよ、クロ。そんなにあわてて。」

「オッ、オットンが。オットンがわたしの赤ちゃんをさ

らっていったの。」

それを聞いておこったルリは、空に羽ばたき、森中に聞こえる声で言いました。

「森のみんな、大変だ。クロの赤ちゃんが、オットンにさらわれた。みんな、手分けして探してくれ。」

「オットンだってよ。」

「クロの赤ちゃんがさらわれたって。」

森の中は、そうぜんとりました。

森中の鳥たちはいつせいに羽ばたき、モグラたちは、木の葉の下や土の中を勢いよくほります。他の動物たちは、そうさく場所を決め、オットンが行きそうな場所をくまなく探し始めました。

太陽が西にかたむき始めたときです。

「いたぞ。オットンがいたぞ。」

クロは、無我夢中でかけ出しました。

「オットン。わたしの赤ちゃんを返して。」

「ママ、どうしたの。」

「こわかったわね。もう大丈夫。ママが助けに来たからね。」

「ちがうよママ。オットンおじさんは、がけに落ちそうになったぼくを助けてくれたんだよ。それに、ママが帰るまで、さみしいだろうから、いっしょにいきましょう。」

オットンがゆうかい犯だと思っていたクロは、それを聞き、自分はずかしくなりました。

「ごめんなさい。オットン……。わたし、あなたが、赤ちゃんをさらっていったのだと……。あなたのことを何も分かっていないのに、勝手にこわい人だと決めつけて……。ごめんなさい。」

それを聞いていた、森のみんなも自分の行動を反省しました。

「いいよ。おれ、こんな見た目だし、人見知りでみんなとも話をしようとしていなかったんだから。おれも、もっとみんなに分かってもらおうとすればよかったんだよ。」

オットンの優しさに、みんなは涙をこぼしました。

小湊の森に冬がおとずれようとしています。オットンは、みんなとたくさん話をするようになりました。今日は、クロと赤ちゃんが、オットンの家に遊びに来ています。小湊の森は、今日もみんなの笑い声であふれています。